



繪本
敵討

岩見英雄録

第一

三

遠
2509
35-10



門 遠
號 2509
35-10



繪幸渡仇英雄録後編卷之三

副子赴宇都宮話

再說推松左平を副子并又書のする子と派するまで後
 いける月の朝に宇都宮の花街なる三浦屋に即右清門の家
 訪ひゆき躑躅の情をひらき又皺主夫婦も驚知己とつひ
 を平が書い字村の昔より好む深うし幸なるい甚ぞ悦ひこ
 と能く為れ来りては味しけり内方阿高も善なくいやや
 去り間々飲み酒を勧めし懇懇は食意し好時ふを平副
 子事状語を聞き我ら所縁ある人の娘に免き難き全
 子の所用これあらずし強く言ふにさせやけり中ある家
 生育は娘やまは何事書阿高の妹も思し懐を垂り下

長元元年後編卷之三

さる下りくも雅も妻くや、後いぬきびは即右清門はく領業
 一上終は雅松の海。時にお供ふすその家よ其里りるはせり給
 て給ふることも女に離婢ともは自ら庖厨をばつるさるて
 あり故に酒肴を調じ供給いともま先やりるを引て嗣子に
 招きこき席よ其しむるは嗣子もがう竹の杖を携えよるも
 と感らよ出く言女の後進よ備て座を就くもどは言女を顧り
 きて言進く最のしけ方こそ二浦屋の家公こそ西屋に居る
 かのすそ引合は嗣子も路を低く後を引初掲の口は婦
 ぬるく面展げよ物云一も松のくわく後志を教給り何や
 見月氏獨清くははる為たかな全海に夫のほる番能形色い
 二浦屋公中太はほびも情の意面よ露を移何くきと物流

今時を猶一々が賣身後を全百兩と定り二十両はその身付と
 涉里八十枚を早お渡一十元と原束互に公底を知らん
 一申るる故由は高議とつらひ年期をその里文券も流ぬき
 各各公祝なりとて文お置出巡りしりるが二浦屋の嗣子に傍
 こ竹杖を並らる杖懸とて果しと証里雅松夫婦は怪し
 問ふはせよ夫婦を兼りよる嗣子とふ合せしむるは詞を
 齊へさきいけおらけ子も杖懸しりて此大切の護身の笑ひ
 いと一言ふ二浦屋さる故何る神符を討し込あるんは併
 今よ言ひ竹杖を筵席等に携へかんもいりぬ靈符の寸尺
 へ初る給もたの長き物ならはび今ぬ短き箱も符をば
 相本より製しその中は納めなま華業るる袋杖懸るふり

長田氏集 録後 用 卷之三

持んこそ使カとつや 嗣子獲身の寸尺を陰に長くもいひて
 竹杖ありて若出三浦屋又見せよりの是やふ討に所
 小世子よを怨と刀を三浦屋に切せ却てその疑を遠く其
 疑を解自ら長く刀を離さぬ故に謀じめん業やうに三浦
 屋の夫婦とも子性相見為実温厚は斯る妓館のまじり
 似るる人を懐むを深く懐あるはひま 然る許多の家娘
 も本石るを秘をまゝい自ら恩と直子感 忠懐不動誓符不
 語ふ笑門致福の比倫室しうにそ業願望なり且神と
 致ひ併にさび信をわさく 意は推松又帰に能く是等の
 事を知り居し一故さくこそ初に計うひぬ三浦屋を子洗ひ
 漱せし何むらう竹杖ありて 押頂くは業言やふ小兒一は是とも

其も付む竹の申哉とんひほど 知さざれば若松を平打笑ひ
 甚言なり女盜賊の嗜む刀や能も隠し 握り改む一寸を
 うま下の節をさきと二ツ三ツ拵ぬ 扱や金と微碎の粒を
 に終らるふら高女は俱に復讐の娘の細よ 見終るとお
 笑つ嗣子の伴とつ 船に駕りては 陰ふかとい内は三浦や
 扱致を丸隠孫六兼九が扱やる 扱致をさき 味を欺く一尺で
 寸の中刀細身るるも 洋も自ら濃く 扱致他日見る斗
 乃業相り若松又婦を 嗣子諸大は 討に下り剣を
 扱一扱ふ扱もて 扱るるも 扱何れ 扱三浦屋もす
 頂き 扱を納め 嗣子ふ扱 扱中扱も 扱主夫婦
 扱きの如く 扱討の娘 扱どの 扱とふる 扱るる 扱何る 扱守



寛政九年三月廿三日



中とすも故に平を膝をきめて中けけ娘先年痲瘋を
 患ひ九死一生の大厄を過し父母を痛く憂ひ多くの醫
 治を請ふ治癒されずして幼少の病は怪しく頗鬼
 憑の如く附して思はば標志哀しく苦惱する不思ひ難
 親しく嘆きその城守林の別當より道徳者老僧の術を
 るに懇小祈禱を乞ふせよと酷厲なる疫神の惡劇を
 乃細を持たふ神前小供し加持せしめて此刀を以て
 再びけけひつてけけを娘の枕に置きて平愈の後も
 房下を憂ふ或は出羽の昔いふは傍げけ元運女子の
 年の時真なる小任を頼む好む益も多敷城多く殺世
 致し不るれば怒りけけを能く得べし今神威を假我徳

成備世剣をばめく疑ふ事なく生涯守りけけ長く邪神陰
 鬼幽冥の祟を除くべきと細く教へ授けけけけけの
 如くけけ小俄小病人疾ひ慄き狂ひけけけけと例さす
 暫が間にけけけけけけけけ小是よを病速小除き夢の醒る如く
 不日けけ平生小護ぬ去りけけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
 その何れ此刀を側近に置けけけけ其患を忘るは始終身と
 けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
 ひ下さるへやま婦病を憐れけけけけけけけけけけけけ
 けけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
 昔よを誠実なる為人飽すけけけけけけけけけけけけけけ

しやるた物なる難有御祈禱の護身刀なりふ陰分より之れ
 下去りし素本他は七柄鞘けり二尺二寸の短刀に
 納免とて一りやつ内は蓋の敷巡る小彫く辭し杯盤と納
 めさせ御金もたすは後へぬき娘をけしめし
 支那の月輪も娘も遅くは担一夜の留りしと
 辱くいとまご泊ぬ取上客をけしめし
 我のそきん帰すも娘の何角の支度も有るなり明日の
 とも途の駕と兼るるよふ公静小用意の道とくまんと
 ばち平引ぬめ娘んとも習を備りせし支度とくも疾
 細いひしはさいおし津連帰るるごとく時と福さぞ有興
 信ひ来るるおきい嗣子と若松支那も是途のめぐみと附

互に惜むむの餘情人目の園を憐れくまとい言ねや今更
 流石別色の本をとりあふ三浦の館を小付り用意し
 糸物も糸物もい支那も門迄送るつて見送り見廻し
 暗涙の一滴華燈の思も寒る胸想像さ定めさき侍世の態
 ありき是非なるを

五歌渡迫挑玉須話

三浦を四郎右衛門と嗣子とけしめし
 弾の技を試す益悦び鐘を鳴らす娘の如く初る目を経る名
 と玉絹と改め呼び歌を以て遊客の送る終き酒宴の具を添
 ると帷子と客の枕席を薦めそ若松支那の深く託せし
 あるを館に支那乃晴し玉絹が公るる客を拒く所謂

舞妓藝児りんとは世も多き酒妓の本色を宗として鈴雲暮
 雨の同屋合敷とのまじりたる娼妓とを絶て顔そ異しせり去れ
 聲技といふ本色は「鬻」を唱へて居りたるも金支の
 挑むる意はそい意ゆゑにりも情多しや流る水も花あり
 喜ばる風は靡く柳の己が随意なる艶治落伴の煙華の情態
 今も昔も替はるを聲技と名せり色を削ひ淫を鬻ぐの者
 多かりり色は三浦屋の玉消も定めりその新も人彦は近き
 聖を失ふ者多かりり去れ嫖客蕩郎の習ひ如何にして靡け
 んものと各かを畫はれ程小才藝を志するあり容色を恵ふ可
 迷花碎月播くの請婢小服の事り色は館中も其麗は益
 屋を潤しぬ玉消毎も紅綿袋は入彼兼元の中刀を獲刃は逆

推しはごまごま移し遊女の男に護身刀を嗜むとを扱を
 由ある武家の娘の奴を果せんとあど奇を好む人情つき
 壮年の武士の輩は前傳を彼方け方より拓くはよその全
 第一時曲中は扇成比ぶる者も好ある日けや都官も退き
 一東國の武士日田官兵衛といふ者るを其旅亭の主人
 と引具三浦が許へ入るる容貌も色も骨も年數四十
 許とて猿の眼は焼乃髪一曲有る面骨りほど衣裳佩
 刀も後打拵あるが如く重き名妓を集へ大宴成開き
 酣歌喪飲四隣を勅樂し以居りて頃高名の玉消と云ふ
 女帝を呼まじとて席は逆意し一座の衆眼色は棄りて
 嬋娟を振ひは官を扇開れとて暫く居りて酒

数巡るより其喜興をくし生一自ら大蓋を多し玉酒を
 屬るよび玉酒生得酒を嗜ぶとも會新し一那是を飲飲
 りぬ皮兵衛仲長は向ひ今宵の花を催彼と選ぶまをもは
 世玉酒と定むべしと申す玉酒おもしろい層わらぬ身と偽
 更朝と思し寝る方懐妊しきい下保の生得病多き為
 此いづの園の所知り免しあつといふを皮兵衛も詞を賜
 再三再四掩りりども筵席の周旋をいつきども眷顧を祈りま
 づんば旧房事の君のよ限り中さば誰人よは流して辞謝中
 ぞ斗ふ一御怒りせりも分解せりや二幸ひはゆくと望むぬ
 るぞ官兵衛公中大に怒り何なる意地強く頻り大蓋
 より玉酒は筆度とるく酒を俯め辞謝せんとすぬ玉酒

も酒の碎次第は汝増今も筵席は堪りし縁を下り酒を成
 醒さんと我房は来り体しども碎さる醒さる館を正門
 お儀酒は碎き筵を勤老難くは嫖客の子あせ給り病を成
 と辞謝辭下りしと縁がひらる我生子の如く言を深き玉
 酒が日頃恨みぬめき性るふ公地惱はあつらる面色をんをい
 ことぬ悩もあつた外は公を並ぶも遠く何らひるは快
 くあるし早く体しこそよれと忙く離妓了樂は命し玉
 酒と傭房は伴せしむけ時友去清を頻り玉酒と好来と
 促しを伴長をばはしとす来り玉酒を多き病をば
 下いと改りきども官兵衛文に同納む彼を呼ぶぬ限り何時
 ともは妻と初くまどとをを愛して大に罵り強はるも業内

一、日田と付ひ来り、後亭の主人彼と控へ物々諫めむ
 まで、此も用ひぬ人々、思は持餘し、館より初と告る、四郎右
 衛門出来て日田の命を護り、後を自名を上げ、其來時
 の辱あるきは、以謝し、お玉箱より宿疾を懐き居り、糸澤庄
 安を勤め、糸澤毒の女は、此處に定め、糸澤を愈ひりさ
 せ、いづも何事餘の女は、彼が代り、糸澤下さるが難き
 幸あり、あり、あり、いと、此に寄る、お安は、清眼と、晴し、仕仍を
 のび、武士と、欺くとも、信と、まきや、是罪、味、あ、む、我、自
 玉箱が、房へ、玉を、病の、体を見、上、そ、引、指、来、んと、起、ん、空
 せ、ま、は、日、郎、右、衛、門、思、は、る、う、下、奴、方、を、娼、妓、を、い、生、活、と、し、い、い、む
 一人、く、も、糸、澤、酒、宴、の、筈、と、出、し、糸、澤、改、と、頂、載、は、せ、い、こ、そ、自、然

繁昌の基は、いもの、成、多、く、偽、を、上、と、地、や、病、多、の、事、を、是、激、も
 此、後、日、清、本、陰、下、さ、る、百、出、し、糸、澤、と、持、せ、り、館、一、何、事、今、日
 の、由、免、と、學、び、度、終、つ、ひ、上、ま、る、と、改、を、席、に、付、り、ま、び、く、ま、ど、も
 安、去、清、眼、と、怒、り、ま、さ、る、今、い、も、具、盡、さ、り、胸、を、下、と、そ、刀、を、
 下、せ、ま、立、席、を、見、し、は、た、た、ま、く、彼、を、小、立、對、ひ、ゆ、り、玉、箱
 と、我、目、前、に、石、出、さ、せ、ば、は、通、り、ま、る、が、中、に、傷、な、る、下、酒、の、魚、肉、を、登
 し、巨、盤、を、り、ま、り、と、掴、り、館、主、の、肩、を、打、付、ま、す、盤、を、碎、け、り、肉
 の、四、方、を、散、乱、ま、さ、せ、ば、の、と、驚、き、ま、る、目、も、眩、く、あ、り、ま、る、卓、子、を、後
 懸、り、前、刺、返、し、母、は、屏、風、と、撲、り、破、れ、離、れ、んと、斬、破、家、霜、母、の
 光、を、電、光、の、送、る、が、如、く、耳、際、寒、く、右、刀、の、む、し、ひ、み、門、と、す、り、
 せ、ば、數、多、の、酒、妓、花、車、仲、居、震、ひ、恐、ま、り、遊、す、ま、り、官、去、清、と、葉



日田宮去傍
 大子妓院哉
 雨かー
 争ひを
 醸する園



内「東臣」客舎のるまゝ色紙失ひ斜と落しそを強勅の傍より
 席と遣さく飛が如くよ近所を支え當り者もつづかれの安否
 事あつてうやむ孔をく石盤を蹴散し紙空障子を撃破玉玉
 を出さばは偏等一く苛き目見せんと暴を暴き刀を高頼「醫
 館を自がり飛多んと進迫る」豊家内はつらや厨人肆奴下男
 等持ちきて本と捉げくまみ過ちの世と立並ふも流しき大
 漢子の酒磨るは後の「碎」又の兇悪なる勢いよ争を争くも
 かれは左右をく進もる狼狽撥むりりも多制する振もなき
 おかりはなる隔の紙格とさく押開き進も入る一箇の牡ま色
 白して髪もく口方あして眼は張あり年のほせ二十有餘しそ
 區「淡碧の柳條絹を着」一領の襦色花紋の羽織袴紐は穿

は腰は一口の刀をも帯は日田官を湯が眼前も立塞まて聲を
 かけ先沖新で度一何等の沖立腹るや仔細の守らるるが不
 肖りかう正交沖新の相立は板幹旋やさんと進くと進みよぬ
 官兵湯桶と白眼推糸やを白面即は何ぬるれは我前と立と
 たがり坊おまやと刀を揮きく斬り付ると岡一岡と外へつてを
 入り刀持し腕首成柄端たふまのく握り動かせはけんこれ
 小浪才藏とくをきまよりよ子跡刻術の教授と家業と
 一使家とみ稱するもがけ三浦屋も親しく立へくまらるる
 川の比より不圖玉箱を見初しより屢通ひまきも引よあま
 しの玉箱るれが己よ又六度及びよ毎も折悪く化の忌席
 は婿せくまてつやが一度も小浪の筈はあつと成はる今しも

小儀才寢遅く来りて官去清が置酒せし橋と廊下續きの
 別送るそ小酌し居りて夕に強擾を聞はるびて出て出来
 正とぞ差くし官去清大に怒り臥せ居りて腕首より腕とて
 れども小儀もも痛むれば是下酒狂とてひるがう白母を揮ふ
 る人よ迫り向ふら其後には推さるるに刀もきり右も提
 げ大の漢子を弓の小服に挟み搦より下を降りて知る
 よむうひ口廊右清門及け人の酒食遊宴の料をさるりて
 戸障子器皿も亦碎き破り損ひ價をさるるに
 用それゆへにされは我共今償のせやとて銀をさるるに
 是は清源切の思召辱くひとて切取の事ハ真客の酒狂
 候りる事には且に女性の強きをりて強き損にはおと多し

ひとんはるり財主の所儀ひよ及べき所遊宴の料ハさるるに
 書き認め御縁亭までけりし人ともいハさるるに何れも
 こそ及びやさげとせも是れは男の器振りしけ場とて
 けしひびゆるれどもそいんよよとてけ男の器振りしけ場とて
 ぬしづぶその跡を清くする者も後にも万事我共引合
 せしるるに押伏し日田官去清が懐中より白帛紙袋と引合
 せしるるに打笑ひて其重りんが黄白不之の真客をさるるに早く儲
 費用の敷といふやといふ程は花車仲居の口には銀の令を
 持てその價と論じしるるに告りぬば有難き其の金を
 償ひ終り又その鼻紙入を日田が懐に推納せしるるに早く
 要事なりと引合ししるるに門口へ突出せば官去清は念

徳川御成金後編卷之三

限をりしと雖小浪が武技力量は拵が是く叶ふべくもなきを心
 えおせしとほぶやましく立去りぬ程に三浦を度靈
 と掃ひし公地を館主を始め皆く大に悦び小浪が勇武
 賞更子酒宴を設け館中の諸姫をある限り席に列ね
 館主支那の自ら出く前刻よりの厚意を附し酒席看
 今日の御ひは當り難くはども我々支那の代りして女共
 と只今館中は居合せの限を心度與を添まつせし間を後
 へ寝る程に玉指の代りての喜梅を添まつれりさび居り
 伏居りし間ぬし公地懐くいり百奉せしとたさぬぬ
 愈し小浪も厚くこれと附し御意を巡り以て了髪を
 三浦母子に扱玉指の玉の響糸の懸掛我身より取りし

るうとて時を憂ひ怖れて思ひ憐れがせしは小浪の大人の
 新め路りし申すはちよび人くを皆け是くよび集りて
 のよきと程く同いさせぬ小浪の君の由座をぬが寫の程も
 字をらんとして此程をいりて病うち病しやあまを後くや
 又い公事くぬとてお師のひぬとありしとば所出つ小浪
 むしひやせりや如く由座の我信支那のうき病を病と
 小く瘡いりて是迄一居出やんと辞くその世を退りり
 夏子日田官兵衛の己が自得の恥辱を省りて如何月して小
 浪才藏或撃撃搦し懐を偏さんとゆりや唇やを於悪意等と
 たらし三十餘人を繕びて途中に結せをき月一を人を列連
 再び三浦を指く急ぎり

後身金巻之三

十二

貴統謀と小浪才藏闘話

去程日回官兵清り同志の兎後二人を引奥て三浦屋の門口まで
 再び来りその男の小浪才藏居る兎後等以叫きよれんべに
 人強攻り門口よりあつぬ俤を中へ小浪才藏及よ松ヶ野
 へ度事ありし御宅を推系し御留ま由け所へ御出のよ
 一よりけと急ぎし者たんと侍くらせよと懇勸よ去
 くれと云浦屋の丁男各位の芳名を承りやさんとならぬ二人
 も我く名ありいささ無あり只小浪才藏居る中へ入らば居
 のふたを河やが暫し肆頭を出出合分は板や是れいと
 云りさべ丁男の何の意もなく仲居に託し奥へと通されし
 浪才藏人の何やむと忙し身を起て腰を下り腰刀の撃

懐も懐りも故に腰に帯流し肆頭小出り吃と見し誰人とも
 はなれや真小浪才藏とみそこの路頭小浪才藏先け言入せし
 會釈をとい二人詞を拵へ一見の我偏剛く皮思石をも顔で
 の使ふ不嫁し御智意を假や度候とれ五に就共出せり意
 玉珠を假さしひが大幸よいと後へ才藏語りてあつ俤を
 詞は信せ門口を出入る御と二人は抱ふ事いと組掛あ人左右
 両腕を引立んとせり小浪才藏遠ざけ右に振解きたより
 男の腕を把りて引け引け引き右にやと投げきり壁に撃
 れる人ともおきりて倒れをなすせびり子をのべて背面を
 一人の常態にてあつ引廻し失聲をりて投やるふ一丈餘り



徳川御前御用掛 小波才藏



あるみさいや
小波才藏
宇都宮の
柳陌り
日回官去
清を
挫ぐ
園

徳川御前御用掛 小波才藏

一四

とらけく優り伏せ行者ろれびを欺き意外の猿蓑弄怪こと
 言せも累日日田官を清前（まづ）面より形は虫見忘ら白面郎嚮あり
 況碑世我情しとあふぞ思ぬれいざ醒時の本事を見せぬまじら
 曲中往來の好も好もいづれ油燈の丈夫なりふ市中を誰れか我を
 尋る小唄負を交じると大の服は角を立睨つめて罵る小浪才冠
 冷笑ひ固り望むあがりや重きもいづれ世も膝せぬ形勢は安去
 情えんふ立ちあはるる二人あはより小浪を推しけり程小才冠大お笑ひ
 我を逐せとど艶しと計はよぬ女用のお配圖きては等か道
 る後をいそ計はとあはれりるるる二浦屋の奴僕等も小浪こ
 あやまち有んともあやまちを扱げく後進よるる引下り
 て急ひり是を聞よをけ地はあはるる杜丁もも驚る破るこえあはれ

と我もくせとけくはは續きりり梅も小浪才冠へ日田官を清を
 先子之弟後は眼配を配しと郭外の小川流を不子来ぬき
 侍役さる二十余人の悪党等とつと喚り一日は抜連するの光へ
 風は乱るる花の穂先お揮り才藏一人を生中へ追はれ四方
 よも軽し一怒ふその勢ひ壁へ小浪金剛杖又の勇あるも免はれ
 ぬるもあがれはら家系より足ははる尾末は妓院の奴僕市井
 の少年等も嗤嗟ととなり驚るは思の外なる大勢といひまじら
 やらぬ晩更のやと時ふ數十の白面光り眼を射る隣さ誰うきまん
 者もろく小浪才冠の樹林蔭に立集ひられしやいざりて救ん
 ぬもあはれは調状せし見居たりる然も其屋せぬ小浪が膽量万
 丈不肖の面やあはれ群驚る者も四方向引違八方服は記腰

つる刀を抜もやうに撃込敵のち刀應を身成況はるい左右に避
裾を拂ふ跳騰を初と云ふと刃を忽焉とて後小出彼方を
けち一潜り飛名の如く手元入り腕首筋引捆を當り幸ひ
投伏跳居その捷き電光の閃く如く三十餘人の女堂等透もあ
せび奪うけく斬ども斬ども後また刀風空を切るのふて腕衰
眼瞠も足眼四度跳こ進まら官を誘怒り牙を齧り身を操り
大に勢成勅遠悪一各一人の幸二才が自慢教小腰刀三接合
せぬ振る小進進さる醜さよゆられ石すき擲けり眼を遮り漂ふ
和成四方よりすくはく小研殺せや自らゆき極を投りけく
目を切り切り無きば輝亮是小力と得各足を踏座し力を振
ひ研成擲ち喚き叫び群が来る也才花大は嗜り何なる面倒る

る春強めり命なるりの活ゆる間早急去るべ月鬼見せんと大
音は叫りり一人の刀を撲地と蹴墮し奪ひ去て風鳴る響振
り瞬く間に生額双脰脊骨髄骨嫌ひや或は朝枝撃破ハ刀
脊撃觸る小任せや扣き伏せ縛る奴系を所端より持多る刃成亦
落し、懐も小児成痴毒る如く成ははもの大勢面を向成地扱も
く肝膽を砕く官兵誘始先進も竹しとやとひん散くも成
多右往左往小進りりり才藏をたもこそ有る先と云ふ也ふ
てもと来し及く立廻る三浦屋の奴僕をささり其の自餘の牡丁
等も半路不待誘し如くはく其その勇を感稱し急げ他と云
びたれも悪さげらる奴等成飽すや響懲心結ひ快かきよ云
浦屋も疾け扱子成はぬきば許り山楽中居るべ

いふ諸君は小舟にひちさんとのぶらよぞ才氣おめ各功より事
 のりよお返とも志の厚き恩辱ふ森入てひ之の最前まゝある
 りぬ三浦をえ何ともやとさびりむけき定するきひせうへんが
 け場の為体被告やさんとけといふしりが今各がこは遠上を再
 び彼方を系り頼さんおまのぶらるれが暮果ぬ月こやめ宅一ぬり中
 け等の便い云よ及びい今日答直の積まは匡く彼路れと諸人強
 ぬきた神をち己の家居を指てゆせぬれは皆く後叙を因送て
 び突も使者の進退あつては際きくりおとせりくよ評議てせり
 ありる必竟小浪才氣玉箱等が身ここや何等の佳話り有
 隙を續か巻を退るあはる境よへると行座一

繪本復仇英雄録後編巻之三 終

